

データが語る “いま”

本川 裕



第23回

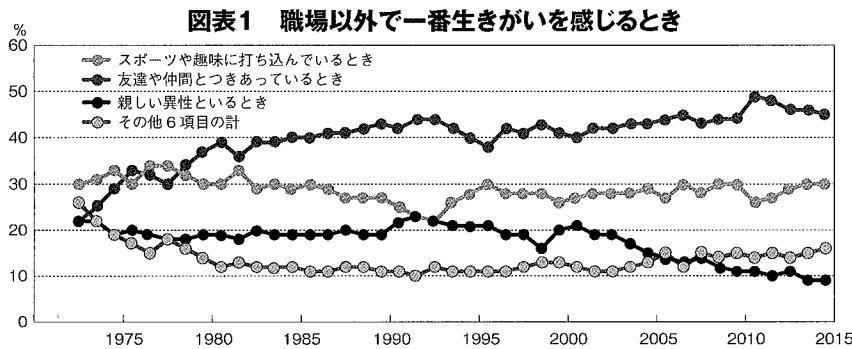
草食男子はいつ出現したか

「草食男子」という言葉は、2008年から2009年にかけて流行し、その後定着した。いったい草食男子はいつから存在していたのだろうか。徐々に現れてきたのか、それとも急に現れたのか。急に現れたのなら、それはいつごろからなのか。これらを示すデータをこれまで見かけられなかったが、最近、上記の疑問に答えられるデータを発見した（図表1）。

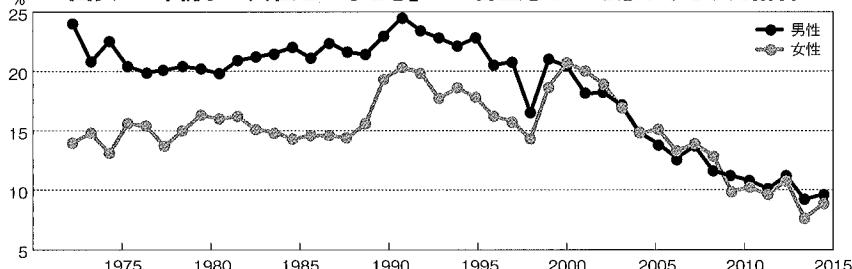
日本生産性本部は、毎年、新人研修の際に新入社員の意識調査を実施している。この調査の設問に「職場以外では、どんなときに一番生きがいを感じますか」というものがある。最も多い回答は「友だちや仲間とのつきあい」、次は「スポーツ・趣味」、そして3番目に多いのは、「親しい異性とのつきあい」である。この「親しい異性とのつきあい」を選択した若者の割合で、異性への関心度や積極性をうかがうことができよう。

この選択肢を選ぶ若者の割合は、以前はほぼ2割前後で安定的に推移していた。しかし、2000年ころから低下が始まり、最近では1割を下回っている。以前から一定数は必ず存在した、異性とのつきあいを最優先とする若者が2000年ころから約10年で半減したのである。これを草食男子の出現といつてもよいと思う。

ところで、この意識調査の回答者は



図表2 「親しい異性といふとき」に一番生きがいを感じた割合



(注) 新社会人研修村に参加した企業の新入社員に対して行った調査結果（2014年度2,203人）。選択肢は図表1掲載のほかに「家族といふとき」「一人でいるとき」「自己啓発に励んでいたとき」「社会に役立っているとき」など6つだが、いずれも、いままで10%未満。

（資料）公益財団法人日本生産性本部「2014年度『新入社員『働くことの意識』調査報告書」

男性だけではない。しかも、かつて2割台だった女性回答者の比率は4割台へと上昇しているから、このような意識変化は、回答者の女性比率の上昇によるものではないか、という疑いが残る。そこで図表2に、男女別の割合の推移も示した。

これをみると、男女ともに2000年ころから異性とのつきあいを優先する人の割合が低下しており、草食化がこのころからはじまっていることが裏付けられる。しかし、それだけではない。2000年ころ、つまり世紀の変わり目で、男女の比率が同水準に並ぶようになった。そして、2000年代ではむしろ、女性の比率が男性を上回り、異性とのつきあいに、男性に比べて積極的との結果となった年も多かった。「肉食女子」という言葉が「草食男子」と対で説得力をもったのもうなづける状況である。

なお、異性とのつきあいに積極的な

「肉食女子」が現れたのは、割合が飛躍的に上昇した1990年であることも図からみてとれる。1990年はバブルが崩壊しつつあった年だ。ボディコンを着てお立ち台で踊る女性たちの姿で一世を風靡したディスコ「ジュリアナ東京」の営業時期（1991から94年）が転換期だったことがわかる。

男性のほうから女性にアプローチするのが当然という習慣が長く続いていたことを思うと、大げさにいえば、これは文明史的な変化ともいえるのではないだろうか。

バブル期の狂騒の余韻が消えさった2000年ころを境に、異性への関心度の男女差が消滅するとともに、異性とのつきあいに関心が薄れることを意味する「草食化」が進んでいった。しかし、なぜその時期からなのか、また何の要因でそうなったかについては、いまだ説得力ある説明を思いつかない。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。（財）国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学（株）主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に「統計データはおもしろい！」（技術評論社）、「統計データが語る 日本人の大きな誤解」（日経プレミアシリーズ）など。